

「中国人向け日本語教育の教材作成」の理論と実践研究

―日本語読本巻一・二を中心にして―

蔡茂豊

一、はしがき

拙著「中国人に対する日本語教育の史的研究」(一九七七年)自序に、筆者は「中国人に対する日本語教育の研究」をライフワークとし、主な内容を、

中国人に対する日本語教育の史的研究篇

中国人に対する日本語教育の教材篇

とに分けた。略称して「史的研究篇」「理論と実践篇」に「教材篇」とした。「理論と実践篇」には、「音声教育篇」を一九八〇年に出したが、会話教育、文字教育、作文教育等が残されている。そして、「教材篇」には、一九八一年七月卅一日現在、「日本語読本」(第一冊)、「日本語読本」(第二冊)の刊行を見るに至った。そして、この第一、第二(巻一、二)は、本論の主題の対象として取り上げた。

この主題で、筆者は昭和五十五年度、日本万国博覧会記念協会補助事業の助成金を受け、教材作成の研究を行い、上記の教材を刊行した。

「中国人向け日本語教育の教材」と読んで字の如く、この教材の使用対象は中国人に限られている。いわば語族によって編さんされた教材というわけである。そして、本文はその理論と実践研究の経緯を明らかにしようと試みるのである。

二、終戦までの日本語教育における「教材」

日本語教育の歴史は既にくくしく、宣教師に対する個別教授、小グループ教授から、領台時代(一八九五―一九四五)の異民族に対する集

団教授、それから戦後、日本に留学にきた外国人留学生を一堂に集めた「雑居」教授などがある。

日本経済の高度成長にもなつて、世界各国にも日本語の学習熱が呼び起こされた。日本語は、今や春ケンランといったところである。

日本語の教授と学習には、教材を必要とする。宣教師の日本語学習は、個別教授や小人数の教授だったから、教材の編さんは思いつかなかったことであろう。また、政府や教育機関の事業対象とはなっていないから、教材の編さんも無理だったに違いない。それに引きかえ、台湾領台の五十年、日韓合併の三十余年、中国東北地方における満州国の十余年、日本はこれらの地で日本語教育を推進した。むろん、教材の編さんはまともに組織された編集委員会の手によって作られたのである。

台湾を例にとりあげると、領台して一年もたずに教授書が編さんされていた。というのは、明治二十九年六月二十二日台湾総督府令第十五号国語伝習所第二十条には「教科用及び参考用には当分他の図書を用うべし」として、下記の書籍を掲げている。

- | | |
|-------------------|-------------|
| (1) 小学よみかき教授書 | 文部省編輯局 |
| (2) 小学読方作文教授掛図 | 文部省編輯局 |
| (3) 小学読本 | 文部省編輯局 |
| (4) 日本語教授書 | 台湾総督府民政局学務部 |
| (5) 小学読本教授指針 | 台湾総督府民政局学務部 |
| (6) 小学読方作文掛図教授指針 | 台湾総督府民政局学務部 |
| (7) 新日本語集 | 台湾総督府民政局学務部 |
| (8) 台湾十五音及字母附八声符号 | 台湾総督府民政局学務部 |

(4)、(7)は現地台湾で教材として編さんされたことが分かる(拙著「中国人に対する日本語教材の史的研究」(三三五―三三六ページ)。そして、一九四五年の終戦を迎えるまで、台湾で使われた日本語教科書は現地の教育当局の手によって作られた。むしろ、「国語」教育の教材として編さんされたのだが、内容は現地の必要と異民族の語学教育であることに注意を払っていたはずである。領台五十一年間、台湾で編さんされた日本語の教材の数は膨大な数であるばかりでなく、語学教育の改善と統治政策によって、幾たびも編さんをかえていたのである(上掲書二三五―二九六ページ参照)。

三、戦後の日本語教育の問題点

そして、日本は終戦を迎えた。

戦後、日本は廃墟から立ち上がり、経済の高度成長にともなう世界の大舞台に再び顔を出すようになった。日本語もこれまた戦前と打って変わった形で世界により広くひろがったのである。

というのは、二次大戦終結まで、台湾、韓国、中国東北地方の殖民地や半殖民地における日本語、または太平洋戦争の占領地における日本語教育は、圧迫された民族にとっては、いやいやながら学習していた言語であり、止むを得ずに使っていた言葉であった。

それが大戦後、日本が経済大国となるや、日本語は喜んで学習される外国語となり、世界の日本語学習者数は三十一万人を越えるといわれている(「日本語教育」42号96ページ参照)。

語学の学習に三拍子そろわなければならない条件がある。それは、学習者・教材・教授法である。この三つの条件が満たされてから語学教育の効果が挙げられる。しかし、ここで取り上げなければならないのは、上記三十万を越す学習者に、どんな教材を与え、どういう方式で教えているかということである。

端的にいえば、日本語教育は「国語教育」と違って、学習者は日本人

ではなく、外国人であるということ。教材は「国語教育」の教科書をもつてして使うわけにはいかないこと。教授法も日本人の日本人を教える教授法とは違って然るべきだということ。この三つの事象をはっきりわきまえてこそ、始めて「日本語教育」が云云できよう。

それにしても、外に色々な問題が起こってくる。例えば、

- (1) 日本で外国人を対象とした日本語教育と外国での日本語教育
- (2) 日本人教師を主とした日本語教育と外国人の日本語教師を中心とした日本語教育
- (3) 日本人が編さんした日本語教材と外国人が編さんした日本語教材

などである。

言葉の学習というのは、何といってもその言葉を使っている国で習う方がいい。これは贅言を必要としないであろう。具体的にいうと、日本語の勉強は日本に限ることである。

日本は戦後占領軍の日本語学習から始まり、経済成長にともなう、日本語の外国人の日本語学習に日本語教育を重視する機運がたかまってきた。そして昭和三十七年、自他ともに日本語教育の中心的存在と見做される「日本語教育学会」の組織をみ、各大学にも日本語センターや、留学生別科のような日本語教育機関が設置された。

日本語教育学会が成立してからはや二十年たった。この二十年間、学会運営の産物として「日本語教育」という機関誌が発行され、一九八一年六月現在、45号まで出している。発表された論文や報告はバラエティーに富み、多くの示唆を与えてくれたばかりでなく、国内外の日本語教育の実態をつかむことができる。大雑把にまとめてみると、

- (1) 外国人に対する日本語教育は、英語を母語とする人が圧倒的に多かった。それが今や世界的にひろまっている。
- (2) 新しい言語教育の教授法(たとえば、チョムスキーの理論を応用した文型練習)、視聴覚器材を利用した方法がとられて

いる。

(3) 日本国内における日本人教師の日本語教育が主であるか、または海外派遣の日本人教師の実践報告や論文が多い。

(4) 戦後作られた教材は主に英語系の学習者を対象としている。

(5) 日本国内での日本語教育は、学習者の出身、文化背景、母語別などには無視されがちである。

(6) 戦前の殖民地、占領地における日本語教育の教授法、教材、論文などは利用されていない。

(7) 日本語を日本語で教えれば、日本語教育の目的が既に達されているという考えが多い。

(8) 「母語別教材」云云がとり上げられたのは昨今にすぎない（「日本語教育」40号一べ）。

してみれば、戦後から今日までの日本語教育（教材・教授法を含む）は、英語を母語とする人々のためにやっているようなものだと思えて言えよう。

言い換えれば、教授法において二語併用であった場合にしても、英語しか使わなかったし、教材に訳文とか説明がついても英語を用いたに違いない。これは戦後、日本のおかれた立場からみて、うなずけられようが、英語系以外の対象を無視した点に日本国内における日本語教育の問題が潜んでいると思う。

端的な例を挙げると、日本に留学した中国人留学生の数は欧米系留学生よりずっと多い。にもかかわらず、英語訳文の教材や、ローマ字表記、かなだけの教材で教えられる。それから非漢字使用圏の学習者と一緒に漢字を学習させられる場合を考えればもう贅言を必要としないであろう。

四、母語別教材の作成

そこで、日本国内に母語別教材の作成云云が取り沙汰された。つまり、これから「母語別」による日本語教材が作られるということである。し

かし、実情はどうかというと、そう簡単でもない。母語別に教材を作成しようと考えするには、その「母語」の言語、文化背景、社会状態、日本との関係などにくわしい専門家でなければ、編さんできるものではない。その専門家が日本国内にどれだけいるかということであろう。逆に、日本人教師が主体となって、「母語別」の当国出身者の協力を求めることも考えられようが、その「母語」の出身者であっても、ある程度まで日本語、日本文化の理解者でなかったら効果半減といっても過言ではなからう。

ここに国際交流基金発行「教科書解題」（教師用日本語教育ハンドブック別巻）（昭和五十一年一月）がある。本書の構成は、「外国人が日本研究その他、特定の目的をもって、一定期間、日本語を学習しようとする際に使用される日本語教科書について解題を行ったものである」（上掲書七べ）とある。配列の順序は日本国内で出版されたものを先に、海外で出版されたものをあとに提出している。

いいかえれば、本書は、国際交流基金が国内外、日本語教育において目ぼしいと思われる教材を網羅したものともみてよからう。それを数字的に集計して、筆者は次の表をつくった。

発行国	母語別	
	英語系	中国語系
日本	六十三	一
外国	十	一
		フランス語系
		インドネシア語系
		計
	六十六	十

注：英語系とは英語による翻訳とか解説のついたものの外、はっきりと母語別を打ち出していないものをみな含む。

右の集計からみる限り、日本が母語別に編さんした日本語教材は英語

系が圧倒的に多いということが証左された。そして、外国で発行して英語系の教材が十種挙げられているが、内訳は殆どアメリカの各大学の教科書だということがわかった。

むろん、世界各国で編さんされた日本語教材は上記の表に記されたように十種しかないということはない。わたしに言わせれば、編集者は少なくとも台湾、中国大陸、韓国で編さんされた教材を見落としていると敢えていえる。

編集者の目から見て、内容が質的に低いから取り上げなかったという理由もある。しかし、台湾、韓国の日本語教育が世界的にみて、高いレベルにあることは誰もが知っているはずである。

昭和五十三年三月、国際交流基金が「日本語教材リスト」を刊行した。上掲書を刊行した二年後のことである。それをまとめると、

日本で出版したもの 九七冊

海外で出版したもの

英語圏

イギリス 三冊

アメリカ 二十二冊

ニュージーランド 二冊

スイス 一冊

アジア

韓国 六冊

中共 一冊

台湾 三冊

ホンコン 一冊

シンガポール 三冊

インドネシア 四冊

中南米

ブラジル 四冊

チリ

ヨーロッパ

ポーランド

四冊

二冊

計五十六冊

冊数から見ると、母語別に作成された教材が殖えたことに賞賛すべきである。しかし、英語圏のために作られたものが依然として絶対多数であることに変わりはない。

五、中国人向け日本語教材の作成

わたしは十数年にわたって中国人に対する日本語教育に従事し、研究してきた。そして、痛切に感じたことは、語族（母語別）による日本語教材の必要性であった。それを東呉大学「日本語教育」創刊号（一九七六年十一月）でわたしなりの構想を述べたつもりである。そしてその構想に基いて「日本語読本」巻一、二、三の編さんにとりかかった次第である。

教材作成のプロセスにおいて、わたしはまず次の事項を決めた。

A 学習目的

一、全教材を三部に分け、百六十課とす。

巻一 六十課。基本文型を中心とし、文法の基礎を固める。（初級用）

巻二 六十課。短い文章を中心とし、文の構造を理解させる。（中級用）

巻三 四十課。応用文を中心とし、文章表現と鑑賞。（高級用）

二、本教材は「読本」として編さんされるものであるが、巻一は基本文型を中心とし、会話とLL教室の教材と組み合わせることで会話の実力をつけさせ、文法にかなった日本語の基礎を固めることを目標とした。

三、巻二は一課毎に四百字から八百字（平均六百字）を基準とした短

い文章を中心とし、日本語の構造を理解させることに重点をおいた。

四、卷三は応用文(日記・レポート、随筆、論説、広告など)を中心とし、文章表現法と鑑賞を目標とした。

B 学習時間と対象

一、卷一、二、三はそれぞれ大学における日本語学科の「初級日本語」「中級日本語」「高級日本語」の学習時間をメドにして、決めたものである。

教育部の制定した日本語学科の「必修科目課程標準」によれば、「初級日本語」(第一学年)は毎週四時間で合計一三八時間。「中級日本語」(第二学年)は毎週三時間で合計七八時間。「高級日本語」(第三学年)は毎週二時間で合計六四時間である。

分量を学習時数に照らし合わせてみると、卷一は十分にマッチするが、卷二、三はどうも時間数が少ないかわりに分量が多過ぎる。しかし、卷二、三の内容はセンテンスの分析と文章表現法に重点をおくのであるから、全分量を消化しなくても、良いわけである。言いかえれば、教師の自主選択の余地を残したともいえよう。

二、しかし、第二外国語の選択科目として復習する学習者にとって、本教材はなんといっても分量が多過ぎる。教育部の制定する選択科目としての第二外国語は二年間に十二単位である。十二単位とは、週三時間の四学期(六十四週間)というわけだから一九二時間。一コマ(九十分)一課を教えるという勘定でいけば、せいぜい八〇〜九〇課(複習・テスト・祭日を除けば)となる。

三、若し本題の教材が一般社会の勤労青年を対象とした場合(補習班や日本語塾)、卷一、二はそれぞれ学習時間を一二〇時間〜一五〇時間を必要とする。いいかえれば一課を一コマ(九〇分)で授業し、残りの時間は練習、復習などにあてればいいわけである。

C 学習内容と予期する目標

一、日本語読本第一冊

(1) 卷一は基本文型を縦とし、文法を横とした。目標の内容を次に掲げると、

目次

前言

凡例・略語表

第一課	清音(一)	一
第二課	清音(二)	八
第三課	濁音・半濁音	一六
第四課	撥音・拗音	一九
第五課	促音	二二
第六課	長音	二五
第七課	アクセント	二八
第八課	挨拶	三一
第九課	はい・いいえ	三二
第十課	わたし・あなた・あの	三五
第十一課	これ・それ・あれ・どれ	三八
第十二課	ここ・そこ・あそこ・どこ	四二
第十三課	こちら・そちら・あちら・どちら	四五
第十四課	こんな・そんな・あんな・どんな	四八
第十五課	この・その・あの・どの	五一
第十六課	年・年間	五五
第十七課	曜日・週	五九
第十八課	月・何か月	六二
第十九課	時間	六六
第二十課	日・分・秒	七〇
第二十一課	助数詞(物)	七三
第二十二課	助数詞(人)	七七

第二十三課	だ・です	八〇
第二十四課	ある	八五
第二十五課	いる	八九
第二十六課	上・下・前・後・左・右	九二
第二十七課	ほど・ばかり・ぐらい	九四
第二十八課	ます	九九
第二十九課	う・よう・ましよう・でしょう	一〇三
第三十課	ない・ません	一〇六
第三十一課	から・まで	一一〇
第三十二課	に	一一四
第三十三課	時に・前に・後に・ところ	一一八
第三十四課	を	一二二
第三十五課	で	一二五
第三十六課	と	一二九
第三十七課	する	一三二
第三十八課	て	一三六
第三十九課	ては・ても	一三九
第四十課	てから	一四二
第四十一課	ている・てある	一四五
第四十二課	て下さい	一四八
第四十三課	上げる・下さる・もらう	一五一
第四十四課	てあげる・ていただく・てもらう	一五五
第四十五課	形容詞	一五八
第四十六課	たい	一六二
第四十七課	たり・たり	一六六
第四十八課	た・たら	一六九
第四十九課	たら・たら	一七三
第五十課	形容動詞	一七六

第五十一課	から・ので・のに	一七九
第五十二課	なければなりません	一八四
第五十三課	せる・させる	一八八
第五十四課	れる・られる	一九三
第五十五課	らしい	一九七
第五十六課	そうだ	二〇〇
第五十七課	ようだ	二〇三
第五十八課	ぬ(ん)・まい	二〇七
第五十九課	形式名詞 こと(一)	二一一
第六十課	形式名詞 こと(二)	二一六

以上である。

(2) 第一課から第六課は音声教育で、発音を正しくさせるために、単語を羅列した。基本文型から入る言語の学習法からみて、単語だけの羅列学習法はもう時代遅れとお叱りを受けるかも知れないが、何のことはない。単語(殆どが体言)に「です」「ですか」「ですね」「ではありません」をつけて覚えさせたらちゃんと主語なしのセンテンスになるのだからである。

(3) 第七課にアクセントを掲げた。アクセントを数学で表記したことは、数字の多寡で高低を示したかったのである。日本語は音質と音量で意味の区別をし、アクセントは語の識別において、中国語の声調(四声)のように役立つことはない。しかし、共通語としての日本語学習において、アクセントを抜きにしては考えられないことだし、より正しい日本語をマスターさせるためにもアクセント教育が必要であることは贅言を必要としない。筆者をして喜ばしく思うのは、最近台湾においてアクセント教育を重視し始めたことである。本学の日本語学科は別として、文化大学、淡江大学では、アクセント教育に力を入れている。選択科目としての日本語教育や一般の日本語塾においても、一日もはやくアクセント教育を重視してもらいたい。

(4) 第八、九課は日常挨拶と肯定、否定の表現。

(5) 第十課から十五課まではコソアド系統。

(6) 第十六課から第二十二課までは、日常生活と切っても切れない「時間」と助数詞。

(7) 第二十四課の「ある」と二十五課「いる」は存在詞。第三十七課「する」はサ行変格活用の特異なる動詞。中国人学習者にとって「ある」と「いる」との使用別がはっきりしない場合が多く、授受関係も中国語では日本語のようにうるさくはなく、「する」に関連した複合動詞は複雑極まるものなので、とりたてて取り上げることにした。

(8) 第二十六課は「位置」を示す名詞で、第五十九、六十課は「形式名詞」。中国人初心者は、日本語の形式名詞を理解するのに随分時間がかかり、何回も説明を必要とするので、一番後にした。

(9) 上記(2)～(8)項を除いて残ったものは、助動詞と助詞である。六十課の中、二十九課をも占めている。端的に言えば、日本語学習において、助動詞と助詞が非常に重要な学習項目であると同時に、助動詞と助詞との使い方ができずに日本語をマスターしたとは言えない。

何故なら、基本文型はあくまでも助詞、助動詞を文の成分の「あゆひ」となっているからである。言い換えれば、日本語は助詞と助動詞によってコントロールされていると言っても過言ではなからう。

たゞ、ここで問題となるのは、助詞と助動詞との排列である。筆者は「だ・です・ます・ましよう・でしょう・ない・ません」を前に置いた。そして、格助詞をその後に行し、用語の連用形、終止形、仮定形などの文法事項を取り扱った。

(10) 第四十三、四十四課は授受関係。中国語の授受関係は語順によって決められるが、日本語は授受動詞と補助動詞に決められるので、よく間違ふ。そこでできるだけ用例を挙げた。

(11) 修飾成分では、一見形容詞、形容動詞しか取り上げなかったように

見えるが、実はこの両品詞は、述語成分の役割を果たすが故に取り上げたのだと言えよう。基本文型において修飾成分も重要だが、その前に基本文型の要素として欠いてはならない述語成分こそ重要だと見たのである。

(12) 第四十八課「た・たら」はテンスをとり上げたが、日本語の過去形をこゝで始めて教えるというよりも、時間助動詞「た」の幅広い使い方を纏めたいつもりでいるのである。

(13) 第五十三課から使役、受身、推量、様態、伝聞、比況等関係の助動詞を設けたが、学習の進度からいって余りにも遅れているという感じがないでもない。しかし、全体を鳥瞰するかぎり、やはり後に置かざるを得ないということが分る筈である。つまり、他の助動詞と助詞は基本文型の学習において先行せねばならない理由がそれぞれあるということである。

(14) 敬語は第四十三、四十四課の授受関係で示されるが色々な待遇表現は各課に散在させ、いつでも取り上げられるようにした。たとえば、第八課、第二十四課、第二十八課、第三十三課、第三十六課、第五十三課などである。

二、日本語読本第二冊

(1) 巻二は上に記したように四百字から八百字の文章を中心とした。主な内容は次の通りである。

目次

第一課	学生	一
第二課	日本語の授業	三
第三課	外国語専門学校	五
第四課	中国と日本との学校	七
第五課	私の家族	九
第六課	自己紹介	一一
第七課	季節	一四

第八課	山	一六
第九課	数字の読み方	一九
第十課	おじいさんと牛	二三
第十一課	日本語の音声	二七
第十二課	日本語の勉強について	三〇
第十三課	日記	三四
第十四課	お金	三七
第十五課	日本人	四二
第十六課	日本列島	四五
第十七課	手紙	五〇
第十八課	春節	五四
第十九課	日本の正月	五九
第二十課	天気予報	六四
第二十一課	新幹線	六八
第二十二課	笠地蔵	七二
第二十三課	日本の区切り記号(一)	七六
第二十四課	日本の区切り記号(二)	八〇
第二十五課	アポロ十一号	八六
第二十六課	うるわしの島——台湾	九〇
第二十七課	師弟関係	九四
第二十八課	ひなまつりと端午の節句	九八
第二十九課	擬音語	一〇三
第三十課	擬態語	一〇六
第三十一課	日本旅行(一)	一一〇
第三十二課	日本旅行(二)	一一四
第三十三課	悪い報い	一一九
第三十四課	七夕	一二二
第三十五課	漢字と仮名	一二六

第三十六課	親切なおじいさん	一三〇
第三十七課	ジョギング	一三四
第三十八課	敬語	一三八
第三十九課	お月見	一四五
第四十課	日本三景	一四九
第四十一課	日月潭と阿里山	一五二
第四十二課	中国の詩	一五六
第四十三課	中国の寓話	一五九
第四十四課	孫文先生	一六三
第四十五課	世界の名言	一六七
第四十六課	年の暮れ	一七一
第四十七課	太陽熱の利用	一七四
第四十八課	かめ	一七六
第四十九課	王貞治	一七九
第五十課	日本と中国との関係	一八四
第五十一課	聖徳太子	一八七
第五十二課	論語	一九一
第五十三課	中国の名言	一九五
第五十四課	明治維新	一九九
第五十五課	日本のことわざ	二〇三
第五十六課	中国のことわざ	二〇六
第五十七課	中国人の生活力	二〇八
第五十八課	中国人の生き方(一)	二一一
第五十九課	中国人の生き方(二)	二一四
第六十課	今日の日本	二一八
第六十一課	日本の歌	二二二
第六十二課	エチケット	二二六

(2) 目次の内容を分類すれば

(a) 日本語に関するもの(第二、十一、十二、二十三、二十四、二十九、三十、三十五、三十八課など)。

(b) 日本に関するもの(第十五、十六、十九、二十一、三十一、三十二、三十九、四十、四十六、五十四、五十五、六十課など)。

(c) 中国に関するもの(第十六、二十六、四十一、四十二、四十三、五十二、五十三、五十六、五十七、五十八、五十九課など)。

(d) 日中両国に関するもの(第四、二十八、三十四、五十課など)。

(e) 生活に関するもの(第一、三、五、六、七、八、九、十、十三、十四、十七、二十、二十七、三十七、四十七、六十一、六十二課など)。

(f) その他(第十、二十二、二十五、四十四、四十八、四十九、五十課など)。

(3) 日本語に関するものでは、筆者は日本語の音声、表記、文字、文法、敬語などを挙げて紹介する外、対照言語学に応じた方式で中国人学習者によく分かるように書いたつもりである。

(4) 日本に関するものでは、国の位置、民族由来、風土、民俗の紹介に努めた。

(5) 中国に関するものでは、中国人の民族性、生活様式、風土、民俗文化を中心として取り上げた。

(6) 日中両国に関するものでは、両国に密接な関係のある部分をとり上げた。

(7) 生活に関するものでは、学校生活、人間関係、自然などの紹介に。

(8) その他では、フィクションとノンフィクションを入れた人物をストーリーの方式で紹介し、勧善、懲悪、激励など人の道を説くところに重点を置いた。

D 編さんにおける主な方式

(a) 巻一のセンテンスは分かち書きにした。初心者には分かち書きの方が読みやすいからである。分かち書きで一番問題となるのは、あくまで

も品詞認定である。むろん、それは品詞と品詞との癒着度合による判定だが、周知の通り、学界では未だに結論をみない。本テキストでは、一応規範文法の文節を単位として分かち書きした。そして、

あの人は、十二階建て、この間、この上も、この度は、この方、この次、このごろ、このままでは、その内、その人は、その後、男の人、女の人、その日は、そのままだに、一年八か月、三百六十五日、三万六千平方キロメートル・予定通りに……

などは一文節とし、

あのノート、机の上に、……ている。……である。……てあげる。……でもらう。……ていただく。……てやる。……

などは二文節とした。
(b) 文体は「普通体」と「丁寧体」とに分け、「ます・です」を中心とするが、普通体は巻二により多く取り上げることにして、巻一は殆ど丁寧体にした。いわば「ます」言葉を中心としたわけである。巻二も同じだが、「だ体」、「である体」もいくつか入れた。

(c) 各課の本文は、その課であつかう文型を縦に、文法事項を横とした内容をできるだけ色々な形式で盛り込んだ。具体的に言えば、格助詞「で」に四種類の形式があった場合、それぞれの形式を多くの文例で示し、四つのブロックに分けて現した。それは各形式の使い方を印象深く強化させることもできれば、教授時数の多寡によって文例の説明をこれまた加減することができるとの目的とした。

(d) 巻一の文例は日常生活における会話体を主としたが、一部は叙述体にした。むろん、これは、読み方の授業を話し方の要領で学習させたいというねらいだが、肝心なのは読み方を単なる読解にとどまることを避けたのである。また、一部は叙述体の文を取り入れたことは、三分間スピーチや掛図(教具として別につくる)をさしながら説明するといった方式で学習者の興味や意欲、それから表現力の養成を考えたわけである。むろん、話しことばと書きことばとしての兼ね合いも考えねばなら

ないが、巻一では話しことばにかたより、巻二に読解力の養成を目指した。

(e) 課を二段組み立ての排列で、上段を本文に、下段は文法の註釈とした。註釈はできるだけ本文に沿って植字し、学習者の便宜を量ったが、註釈の内容によって上下の排列がずれるところもあった。

(f) 漢字の提出順序と常用漢字の字数は無視した。それは中国人故に漢字の提出順序にこだわる必要はないと見たからである。常用漢字を無視したことは、やたらに漢字を使ったわけでなく、視覚で直ぐ意味がとれるなら漢字を使っても悪くないという見方をとったからである。たとえば、「編さん」「語い」をこの方式で表わすよりも、「編纂」「語彙」として表記した方が中国人学習者に対してより効率があらうという見方に外ならない。

(g) 漢字の音読みには片仮名で、訓読みは平仮名で振った。これは初心者には一石二鳥の効果があると考えられる。一は、殆ど平仮名・漢字混淆文で表記するテキストの欠点を補うだけでなく、湯桶読みとか重箱読みの実態を顧かにし、漢字の音訓をはっきりさせることにも一役買うこととなる。最大なる効果は平仮名が読めても片仮名で表わす外来語が読めない問題を解決する一つの手立てとなる。

(h) 音声教育の面で、「参考」として中国人の発音転訛ダ、デ、ドの問題「p, t, k 行の発音問題」、「促音と入声」等を取り上げて説明した。それから一課毎に日本の簡体字を中国の楷書による漢字で対照して掲げた。ねらいは日本式簡体字には

(a) 中国の簡体字と同一なもの

(b) 中国の簡体字と同じでないもの

(c) 中国では簡体字となっているものの区別があることを示したのである。

外に「文法補充」を設けて、必要のある場合に、註釈で言い尽くされなかった文法事項を詳しく説明することにした。なお文法に関する活用は

主として規範文法によった。

(i) 心残りなのは、巻一、二を総括した語彙数である。文例は私の編さんした「日語基本語彙二千字」をもとにして作ったのだが、総語彙数は索引を俟つことにしたい。

(j) 巻三は日本語学科三年生の教材であるため、利用者が少いので本論文では初、中級学習者の教材だけ取り上げた。

最後に

日本語読本第一、二冊(巻一、巻二)作成のプロセスをあらゆる角度から取り上げて述べて来た。これは筆者が日本語教育に従事し、二十余年の体験を理論的にまとめ、具現したものと言えよう。

もちろん、この教材が中国人向けの日本語教育において一番理想的な教材だとは思っていない。何故なら教材の編さんにはこれといった絶対的なレベルがないからである。またこの教材が完善無欠なものだとも毛頭考えていない。もともと教材の編さんに完善無欠なものがない筈なのである。しかし、ここで敢えていえるのは、本教材は母語別によって編さんされた日本語の教材であるということである。

編さんの主体は筆者であるが、本学科の峰矢宣朗、蔡華山・戸田昌幸・荒井孝・松野正志・陳山竜・鍾芳珍諸教官から色々の教示と支援をいただいた。例えば文の添削、書き換え、日中両国文化の討論、内容に対する意見、句読点、音訓、註釈、校正などである。謹んで感謝の意を表したい。(日本語学・日本語教育)